
もう一つのD灰

呪いのマリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つのD灰

【Nコード】

N7669C

【作者名】

呪いのマリア

【あらすじ】

未来を左右する少女・・・そのせいで千年公に狙われてしまう・・・
何人もの人が死に自分を責める主人公・・・切ない恋の物語

（前書き）

今回はD・Gray-manの話をベースに話を作りました^^今回はなぜか外国語が多くでています；イタリア語・英語・ポルトガル語・・・まあ気軽に読みください><

あ！！でもD・Gray-manを知らない人はあんまり話がわからないと思います；

また・・・会えるかな・・・あんなこと言っただけど本当はユウの事
大好きなんだからね・・・

一年前

「神田」

「ソモエか・・・なんだ??」

「ソモエか・・・ってなんだよ!」

「別に・・・」

「ふーんまあいつか・・・あ!そういえば神田黒の教団に行くって本
当??」

「ああ・・・明日発つ・・・」

「え!明日ってそんないきなり!」

「すまん」

「そっか……気おつけてね・明日見送りに行くから」

「…ありがとう」

「!!!!神田が人にお礼言っなんて・めずらし」

「ツてめえ人を馬鹿にしてんのか!!」

「あは〜してないよ〜」

「（怒）」

「しめんつてば」

「…もういい」

「え…ちよつと神田!!」

呼び止めたのにユウは帰っちゃったんだよね・まあうちが悪いんだけど：

次の日ユウは沢山の人に見送られてた・・・

昔はあの目つきの悪さで友達居なかったのに・・・凄いな笑

「・・・っ」

あゝあ泣けてきたよ・・・本当に行っちゃうんだなユウ・・・

私強くなるって決めたのに・・・

・
こんな弱い私・・・見せたくない・・・

「じゃあねユウ・・・ばいばい・・・」

ユウの顔を遠巻きにみて言った・・・

これでいいんだよね・・・

？

< 神田視点 >

「・・・つち・・・ソモ工遅せえな・・・」

「神田様時間です・・・」

「・・・ああ」

あいつのことだから寝坊でもしたんだろうな・・・

「「じゃあね神田！！」」

村のこどもたちが見送る中神田の乗った列車は動く・・・

「・・・っ・・・」

神田の頬を涙がつたう・・・

「神田様？？」

一緒に乗っていたファインダーがこえをかけたが

「なんでもねえ・・・」

つといてかえされてしまった・・・

やっぱり神田もあんな顔だけど人間なんだよね；

<自分>

その頃私と言えば・・・

「ユウ・・・」

一人寂しく部屋で泣いてます；

「私もエクソシストだったらユウと一緒にいられたのにな・・・」

それはどうしょも無い事・・・悲しい運命・・・

私は何日も何日も泣きつづけた・・・

それが事の始まりだった・・・

「・・・っ・・・ユウ・・・」

「なにがそんなに悲しいのですか？」

「え・・・だれ・・・？」

「私の名前は千年伯爵デス」

「せんねんはくしゃく？・・・」

「そうデス」

「ユウが居なくなっちゃったんだ・・・」

「ユウとはダレですか？」

「私の幼馴染なの・・・でも黒の教団に行っちゃった・・・」

「エクソシストですか!!」

「おじさんエクソシスト知ってるの??」

「おじさんはよくないですよ・・・ええ知ってます」

「ユウはなにも教えてくれないの・・・ねえエクソシストって何？」

「・・・それハ・・・我輩も教えられません」

「なんで・・・君が必要だからです」

「必要・・・?私か?」

「はい^^貴方には未来を左右する力があるんです」

「未来を・・・そんなに凄い力なの？」

「ええ常識破りなほど強大な力デス」

「へえー」

「その力を使えばエクソシストなんて簡単に殺せますそのエクソシストも一生貴方のものデスヨ」

なにいつてるのこの人・・・

簡単に殺せるとか・・・

それにエクソシストって・・・

ユウも殺されちゃうじゃない・・・

「ユウを殺すなんて私が許さない・・・そんな貴方に力を貸すつもりもない・・・」

「・・・それなら・・・力づくですネ」

千年公はいきなり変な物体を出してきた・・・

「なにこれ・・・」

「教えといてあげましょうこれはAKUMAというものです」

「AKUMA・・・これが？」

なんていつてる暇ない！！ヤバイ攻撃される！逃げなきゃ・・・
！！！！

「逃がしませんヨ」

私は護身用の拳銃をAKUMAに向かって撃った

これであつただろ・・・

「そんなのAKUMA達にききませんヨAKUMAを倒せるのはエクスリストだけですからね」

なんで銃がきかないんだよ!!

「・・・助けて!!! 師匠!!!」

まあ私の師匠じゃないけど;

師匠は今絵でも書いてるかな・・・

その頃師匠は

「・・・?・・・ソモエの声が・・・?」

ソモエはユウ君が教団に行ってここ数日元気が無かったな・・・

・・・!!! もしや・・・

悲しみに千年公が目をつけたかもしれない・・・

そう言って師匠はソモエの元へ向かった

ソモエはもうヘトヘトで反撃する力・逃げる力さえ残ってはいなかった・

「師匠……」

でもAKUMAは私に攻撃する……

「ユウ……
きゃあああ」

AKUMAのもった刃物が胸に直撃

「やはり解毒できますか」

解毒……？何それ……

「教えてあげましょウAKUMAに刺された人間はAKUMAのウイルスに感染して
自分もAKUMAになってしまいますヨ」

心を読む……

「でもこれで最後デス 貴方をホームへ連れて行きます」

「やば!!--!」

「そうはさせませんよ・・・」

「師匠!!--!」

「・・・邪魔者が入りましたネまた迎えにきますよソモエ」

そういつて千年公は消えた・・・

師匠が来なかったらどうなっていただろう・・・

結局私って弱い・・・

この数日泣いてばかりだし

強くなるんだ・・・ユウに負けない位・・・

「無事ですか・・・？」

「あ・・・はい・・・ご迷惑をおかけしました」

もう人にばかり頼らない

「無事ならなによりです」

「ありがとうございます・・・それじゃあ失礼します・・・」

「あ！ソモエ今のやつには気をつけてくださいね・・・」

「了解しました」

私は早足で帰った・・・ここにちゃいけない・・・そう実感した

A K U M Aとの戦いで何人ものひとが死んだ・・・私のせいで・・・

「ここを出よう・・・」

さっそく準備をはじめた・・・明日の夜明けまでには発とう・・・

<神田視点>

「神田君!!」

「・・・つち・・・なんだよコムイ・・・」

「こわいなゝっじゃなくて君の故郷を千年公が襲撃して大勢の人が亡くなったそうだ・・・」

「・・・死亡者の確認は・・・?」

「何しろ酷い死体で身元が確認できないんだ・・・でも・・・村の半数の人がなくなったらしい・・・」

「・・・一人にしてくれ・・・」

「・・・」

コムイは何も言わず俺の部屋を出ていった・・・

「村の半数だと・・・？・・・！！・・・ソモエ・・・」

静まりかえった村・・・一人走る少女の影・・・

ぱあっああ！！（車のクラクション）

「きゃああ！なんなのよ！つかここどこよ！」

村を出たのはいいが何処に行けばいいかわからない

ひとまず人に話を聞こう・・・

「すみません・・・？」

「benarrivato」（いらっしやいます）

「は？」

聞いたことも無い言葉・・・ここは・・・もしかして・・・外国！！

!!

「cosa?」(どうかした?)

「なんなのよ」

「mica giapponese?」(もしかして・・・日本人?)

「どうしたらいいだろう・・・勉強しとけばよかった」

「giapponese parlare ab」(日本語はなせるひと)

「何喋ってるんだろう?」

「atte」(できるよ)

「あゝ?」

「アナタハニホンカラキタノデスカ?」

「え・・・日本語・・・？・・・はいそうです」

「ワタシスコシカニホンゴシャベレナイ・・・」

「そっか・・・ここはどこですか？」

「ココハイタリアデス」

「イタリア・・・」

「ドコヘイキタイノデスカ？」

「ちょっとわけがあつて村を出たんです・・・」

「一気に雰囲気を悪くしてしまった

「すみませんそんな話して・・・」

そういうとさっきの人が

「キミハワタシガメンドウミテアゲル」

つとはつきりいった

「いや・・・そんな・・・」

見知らぬ人を頼るなんて無理だ

赤の他人だし・・・

「ヒトハササエアツテイキテイクモノダヨ」

その言葉でこの人が死んでしまった母さんに見えた・・・

「ねえソモエ・・・人という文字は人と人が支えあってできているのよ・・・」

だから困っている人がいたら支えてあげなさい」

母さん・・・

強くなりたい・・・

そう思うのに

涙が出るのはなぜ？

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

泣いた・・・泣いた・・・これ異常ないほど泣いた・・・

ごめんなさい

今は弱い私で居させてください・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

眠ってしまったらしい・・・

「オキタカイ？サアキヨウカラハタライテモラウヨ！」

「え．．．やとつてくれるんですか？．．．」

「メンドウハミルトイツタジャンイカ」

「ありがとうございます．．．ございます．．．がんばります！！」

ここから私の新しい生活が始まった．．．

あれから1年．．．イタリア語もだんだんなれてきた

そして今日はたまったお金で旅行に行く

「La veda」(いつてきます)

「Acquisiscamente」(気をつけてね)

「S&ppigrave」(はい)

私の旅行さきは霧の都ロンドン

その頃の私は忘れていた・・・千年公のことを・・・

ロンドンに着いて汽車を降りて町を散歩していると

「夜郁ソモエ・・・確保します・・・」

「・・・AKUMAなんでこんなところに」

長い間見ていなかったAKUMA

・ ひたすら逃げるけどやっぱりAKUMAのほうに速いに決まってる・

でも・・・

「抵抗スルトコロシマスヨ・・・」

「やってみなさいよ・・・」

逃げてみせる・・・!!

町の人を掻き分けながら走る・・・

「は・・・っは・・・はっは・・・」

逃げ切った・・・

「ふゝ疲れた・・・」

ユウ・・・

今何処に居ますか？1年前の事故が私のせいと知ったらユウは私を嫌いになるよね

だからユウの力・

うつんだれの力も借りないで私は千年公から逃げ切ってみせる・・・

「・・・ぐっ・・・／／／／／」

腹の虫が／／／！！

ひとまずお昼にしよう

「ロンドンって・・・英語通じるかな？」

「The order?」(ご注文は？)

「I hope the cheese hamburger steak and the salad」

(チーズハンバーグとサラダお願いします)

「It stood on ceremony」(かしこまりました)

ちよつとしてから料理が運ばれてきた・・・

「おいしそういただきます」

つといて一口たべた

「うま!! 激ウマ!!!!」

眺めも良いしさいこう!!

「待ちなさいAKUMA!!」

幸せに浸っている中

聞き覚えのある単語に身震い・・・

A K U M Aと戦ってるってことは・・・エクソシスト・・・

髪が白くて目がきれいな男の子のあとに

長い黒髪をポニーテールしている・・・・・・・・

ユウ・・・・・・・・

「・・・嘘でしょ・・・こんな所にユウがいるなんてありえない・・・

」

二人の少年はA K U M Aをいとも簡単に倒し

このレストランでお昼を食べるらしい・・・

「来ないでよ・・・きずかないで・・・」

身を潜めていると私の机の近くにある窓ガラスにA K U M Aが突っ込んだ

「夜郁ソモエ・・・ミツケター!!!」

「え！なんでこんなにタイミング悪く！！」

ユウたちもこのAKUMAにきずいたらしい・

私は帽子を深くかぶり窓から逃げ出した

「ソモエ・・・アナタヲホームヘツレテイク」

「いや・・・っと言ったら？」

「ムリヤリニデモツレテイク・・・」

「ひどいわね・・・私あなたを攻撃したくてもできないのよ？」

「ソナノシッタコトカ・・・」

血も涙もないな・・・

「大丈夫ですか?!?!」

遠くからさっきの白髪の子が叫んでいた・・・

って事はユウがどこかに!!

「ヨソミヲスルナ!」

「きゃあっああ」

見事命中・・・出血酷いな;

「大丈夫ですか!???」

あ・・・白髪の子・・・ってかユウは?

「えへへ・・・大丈夫じゃないかも。。。」

「今手当てしますから!!」

「いいよ大丈夫だから・・・キミ・・・名前は?」

「大丈夫じゃないですよ!!……アレンウォーカーです」

「大丈夫だつてば……出血は酷いけど……その変な後はよろしく」

「まってください!!貴方名前は?」

「……名前……ユキだよ」

とつさにでた私のお母さんの名前……ユウにはばれちゃうかな?

「おいその女!チョットまで……」

この声ってもしかして……ユウ!??ってかAKUMAがいなくなってる!?

もしかしてユウが倒したの……?

「はい……?なんですか?」

最悪だ・・・帽子かぶってるからばれないかな？

「ホームへ連れて行くとはどういう事だ・・・理由を話せ・・・」

「嫌です・・・」

「話せって言ってるんだろ！！」

「ちょっと神田！」

やだな・・・会いたくなかった・・・

「ユキです・・・助けてくれてありがとう・・・でも理由はいえない・・・」

「なんだと・・・！！！！」

「・・・！！神田！人には知られたくない過去だってあるんですよ！」

ごめん・・・私のせいで・・・皆・・・

シンジャッタ・

「・・・ごめんなさい・・・」

「ユキ・・・大丈夫ですよ・・・神田謝ってください！」

「・・・うち・・・なんで俺が・・・」

「はやく!!」

「・・・すまなかった」

「ごめんなさい・・・」

謝ることしか出来なかった・・・

昔の私だったらここで泣いてたんだろうな・・・

「良かったら僕らのホームに泊まって行きませんか？」

「え・・・」

「モヤシ何言ってんだテメエ・・・」

「だってこんな格好じゃ歩けないでしょ？」

たしかに・・・私の服には泥と血がべっとり付いてるのが状況・・・

こんなので町を歩いたら完璧に不審者・・・

「お言葉に甘えさせていただきます；」

「はい」

アレンはニカッと笑うといきなり私をお姫様抱っこした／＼／／／

「なっ！！」

「黒の教団まで結構ありますから・・・こっちの方が速いでしょ」

「・・・っち・・・めんどくせえもんつれて来やがって・・・」

「ユキは神田の部屋で寝ていただけますか？
僕の部屋にはもう1人エクソシストが寝てて狭いんですよ」

「え・・・神田さんの・・・？」

「デメエ何考えてんだ！！」

「決定ですね」

<数時間後>

「着きましたよ」

高い崖の上に黒の教団はあった・・・

「冗談じゃねえなんで俺がこいつと・・・」

ユウはいつまでもぶつぶついていた

「コムイさーんあけてくださーい」

「了解ー」

「二人して無視してんじゃねえぞ！」

「決定事項ですよ神田、ユキのことたのみますね」

「・・・っち・・・付いて来い・・・こっちだ」

ユウ・・・なんか昔より恐くなった・・・

ユウのへやはベットと蓮の置物しかない殺風景な部屋だった・・・

おまけにクモの巣が・・・

「えっと・・・神田さんって名前なんていうんですか？」

「・・・ユウだ・・・」

「ユウさんですか・・・ユウさんってよんでも「呼ぶな・・・！」」

「え・・・」

「よんだら切る・・・」

昔のユウはこんなに恐くなかった・・・

なにをおこってるの・・・？

夜になってユウはどこかに行ってしまった・・・

「暇だなー」

深く深呼吸・・・

夢をみた・・・怖い夢を・・・
（アントワネットプ
ルー替え歌（笑））

居なくなあつた貴方にむけた・・・

「助けてと」叫んだのに

ダレも来なくて

剥き出しの一人の夜

逃げるしかできなくて・・・

ただ一人走りながら自分を・・・

責めてた・・・

自分のせいだと

ずっとせめていた・・・

A K U M A が私を追いかける・・・

失ってしまった大切な人を・・・

自分の犯した罪を背負いながら

ねえ生きて・・・いだけ・・・

「おい・・・なんの曲だ・・・」

「え・・・」

後ろにはさっきまで居なかったユウが居た・・・

「・・・」

何も言えず無言で立ち尽くしていた

「・・・てめえなんでさっきAKUMAに連れて行かれそうになつてた・・・?・・・」

「・・・」

「なんでなんだ・・・?」

「・・・」

何回ユウに何でだつと言われただろうか

もう隠し通せない

喋るしかないか……

「………はあ……わかったよ……
今から私が追われてる理由を包み隠さずすべて話す……
でも多分それを聞いたら神田は私を嫌いになる……」

そう言うとユウは不思議な顔をして

「なんでだよ？意味わかんねえぞ……？」

つと言った

私はそのまま気づかないでいて欲しい

「わかりたくなくても話を聞けばわかるよ……」

「は……？」

嫌われちゃうな……

「1年前日本に千年公が責めて来た……その現況が私なんだ……」

・私のせいで村の人たちがほぼ全滅・・・私が千年公なんて奴に会わなかったらっ!!」

「・・・なんで千年公に追われてんだ・・・？」

「千年公いわく私には未来を左右する力があるらしい」

「未来を左右する・・・？」

「相手の過去を変えその人物が存在しなかったことにする・・・

・

過去を変えられたものはじき死ぬんだ・・・

過去を変えエクソシストを皆殺しにしろっていわれた・・・

でも私はその計画を拒んで逃げた・・・でもどうしてもその力が欲しくて・・・

こんな所まで追ってくるんだと思う・・・」

「・・・そういうことが・・・」

「・・・っ・・・ごめんなさい・・・神田の大切な人沢山・・・シンジャッタ・・・」

強くなるのに

そう決めたのに

私は泣いた・・・

「・・・ソモエ・・・」

えっ・・・

なんで私の名前を呼ぶの・・・？

「神田・・・ソモエって・・・？」

・・・神田はなんて言うのかな・・・

「・・・幼馴染・・・俺の大切な人・・・」

え・・・嘘でしょ・・・

タイセツナヒトツテドウィウイミ・・・？

「そのヒトのこと好きだったの？」

「そうだな・・・好きだった・・・」

・・・ありがとう・・・

こんな私なのに・・・

「ってか俺なんでこんな事まで喋ってんだよ・・・」

「ユウ・・・」

その時私は初めて帽子を取った・・・

「ソモエ・・・？」

「ユウ・・・会いたかった」

「なんで・・・」

「ユウに言ったら嫌われるかと思った・・・」

「嫌いになんかなんねえよ・・・」

きずいたらユウの腕の中

「ユウ？」

「・・・いきててよかった・・・」

「・・・うん・・・ありがとう」

「ソモエ・・・ずっとここにいるんだよな」

「・・・それは」

「それは？」

「・・・・・・・・できない・・・・・・・・」

そういうとユウの顔が険しくなった

「なんでだ!!・・・・・・・・なんで・・・・・・・・?」

怖いけど我慢・・・

だつて・・・

「ユウが殺されるから!!」

「・・・・・・・・?」

「ユウを私は守りたい・・・私を追いかけて千年公が来る・・・」

「それがどうしたってんだ!」

「AKUMAも強い・・・何人もの人が死ぬ・・・それはイヤ・・・・・・・・」

「俺が守るから．．．ここに居てくれ」

ユウの話を聞きながらみじたくを整える

「万が一ユウが私のせいで死んだら私生きていけないから．．．」

「おまえ．．．」

「好きだから死んで欲しくない．．．そう思うのはいけない事？．．．」

「．．．．．」

「じゃあねユウ．．．死んじゃヤダからね．．．」

静かにユウの部屋から出て行った．．．

そして静かに．．．涙を流した．．．

二度目のさよなら．．．でも前のさよならよりつらかった．．．

「何処に行こうかな・・・」

一人町をふらついていると・・・

「そこのお嬢さん風船はいかがかね」

真っ赤な鼻のピエロが言った・・・

「どうも・・・」

・・・風船なんて何年ぶりかな・・・

ピエロは私に優しく微笑んだ・・・

グシャア・・・ベチヨ・・・（人の骨が砕け肉が削げる音）

鈍い音を立てピエロが倒れた

ピエロの額にはペンタクルが浮かんた

「え・・・」

「ソモエ・・・・・・・・ミツケタ・・・ジャマモノハイジョ・・・」

心の優しそうなピエロ・・・

優しかったあの笑顔・・・

私はまた人の笑顔を奪ってしまった・・・

もしかしたら本当のAKUMAは私なのかもしれない・・・

こいつだけは許さない・・・絶対に・・・

「AKUMAめ・・・好き勝手に殺しやがって・・・許さない・・・」

「ユルサナイ？オマエゴトキニナニガデキル！！」

「To the poor devil whom the wo

world dies out when is born on
his ground, and the beloved
person follows God,
and the moon and the sun rot
ing away share me with the devil,
and die as for the evil there
lie of the soul....」

（この地に生まれ、愛する人は神に従い私は悪魔と朽ち果てる月と
太陽がともにする時この世は滅び悪は死す哀れな悪魔に魂の救済を
・・・）

「ウアアアッアアッアア！！！！！！・・・ナニ・・・ヲ
シタ・・・」

「あなたの存在をこの世から消し去ったの・・・」

「ソナナコトガデキタノカ・・・フカクダッタ・・・オマエヲユル
サナイ・・・イキカエツテモオマエヲオイツツケル・・・」

「お好きにどうぞ・・・」

「あああああぁあつあつあ!!!!」

悲鳴とともにAKUMAが消えた・・・

「AKUMAを倒したいんじゃない・・・私はノアを倒したい・・・それが私の願い・・・」

ノアを探さなきゃ・・・こういう時に力をつかおう

「Show the only position that I look for」(私が探すものの位置を示せ・・・)

光りが示す方向とは・・・

「時計塔!!!!」

急がなきゃ・・・

「今日はハズレだったわぁゝエクソシストも弱弱だったしゝ」

黒のフリルのワンピースを着たかわいらしい女の子に見えるが・・・

・

額にはノアをあらわす十字架の跡……

「みつけた……」

「ん！そこにいるのはダレ？？」

「私の名前はソモエ……あなたは？」

「イノセンスの反応が無い……もしかして普通の人間なの？
人間なのに私に向かってくるなんていい度胸ね」

「……質問に答えて……」

「まあデカイ態度……私はノアの一族「殺気」のユリア・メモ
リ……」

「そう……」

「きやはー人間の分際でどう攻撃するの？まあいいけど……」

「……火よ……この者を焼きはらえ!!!!!!」

何処からともなく炎が現れユリアを囲みもつもと燃えた・

・
・が
・

ユリアには傷一つ付かなかった・

「……!!!どうしたこと……?」

「あんだねゝ私は完璧な人間・ノアの一族なんだよ?そんなの利くわけないじゃん」

どうしたら……どうしたらいいの……ここで負けたら意味が無い……

勝たなくちゃ……どんな手を使っても……

「……I sentence this person to a death warrant」(私はこの者に死の宣告を言い

渡す・・・)

私の魔法はきく訳も無く・・・

「あなたね学習してる？そんなもの私には利かない・・・
次は私の番よ・・・AKUMAよ・・・踊り狂へ・・・」

「ああっあああ!!」

「どお？苦しい・・・？そりゃそうよね・・・ふふふ・・・その死にそんな顔・・・とても綺麗だわ・・・」

「はあああああああ!!」

心臓が焼けるように痛い!!

でも負けるわけにはいかないの・・・この技で最後・・・
・・・

そう最後・・・いろんな意味でね・・・

「もう死んじゃうの・・・？人間はつまないわ」

「残念だけどこれで終焉よ・・・じゃあねユリア・・・地獄へ行きなさい！！」

「なに言ってるの？地獄に行くのは貴方よ・・・？」

「いや・・・あなたよ・・・」

「・・・???.?」

「The devil falls asleep」(悪魔は眠りにつけ)

「だから利かないって言ってんじゃ・・・うつ・・・」

ユリアが勢いよく血を吐いた・・・終わった・・・と思った・・・

「許さないわ・・・The angel cannot beat the devil!!!!」(天使は悪魔には勝てない!!)

「うあああっあ！」

油断しすぎた・・・しくじったな・・・でも・・・！

お願い私の体！！後ちよつとでいいから動いてて！！

「The angel can beat the devil！
！」（天使も悪魔を倒せる！！！）

「いやあああ！！！！・・・私がこんな小娘に壊されるなんて・・・ティッキー・・・ロード・・・スキン・・・ジャスデロ・・・デビット・・・・・・ルルベル・・・・・・千年公・・・・・・私・・・少しは役に立てましたか？」

そっつい残してユリアは消えた・・・もうじき私も・・・

「うつ・・・ゲホゲホ！！・・・」

やっぱりね・・・

「Good-bye A beloved person」(およう
なら愛する人よ・・)

教団ではソモエが居なくなった事でやはり騒がしかった

「何でちゃんとみて置かないんですか!!」

神田をしかるのはアレン・・神田は悲しい顔をしていた・・

「すまねえ・・一人にしてくれ・・」

そう言って部屋へ帰っていった・・

「神田・・・悲しいことがあるといつも一人にしてくれって言いま
すけど

たまには相談ぐらいしてくださいよ・・・」

悲しそうにそうつぶやいたアレン・・

部屋で神田はベットで横になっていた・・

「ソモエ……」

よく見るとベットの下に手紙が置いてあった

「……ソモエの字……」

<手紙の内容>

DEAR ユウ

この手紙を読んだときは私はこの世に居る？

ノアを倒せてるかな？

倒せてたらしいな……

私がそんなにもノアにこだわるのわね

このまま生きてても私すぐ死んじゃうからなんだ

未来を左右する力はね……

私が持つには早かったんだ

力がどんどん私の体を蝕んでいつて

このまま行くと一年ぐらいでね……

すぐ死ぬんだったらノアと戦って死んだ方がユウやエクソシストの役に立つでしょ？

そんな事いったらアレンとかユウは怒る？

怒るよね？

ごめんなさい

でも私は行きます

この世界に平和を取り戻すために

最後にEu amonovamenteat&appear
ute;mesmonosenhorseappeared

照れくさいから外国語で書いたよ

勉強して訳してね・・・

じゃあさようなら

FROM ソモエ

<手紙終了>

「ソモエ・・・なんでこんなもん残して・・・」

読み終えた後コムイが部屋に入ってきて

ソモエが死んだと俺に告げた

予想はしていたから驚きはしなかった

ソモエの亡骸の横にはノアの亡骸もあったそうだ

ソモエ・・・お前はこれで満足か・・・？

「お前だけじゃねえよ・・・俺にも時間がねえ・・・」

俺は蓮の花を見た・・・

すると花びらが一枚落ちた・・・

世界平和なんてどうでもいい・・・

俺はお前のためにAKUMAを倒すだけだ

<数年後>

「あれから一年がすぎたけどまだ世界に平和はもどらねえ・・・」

ソモエ・・・オマエが残していった言葉

「Eu amo novamente at&eacut
e; mesmo o senhor se rebeared」

俺には意味がさっぱりわからなかった・・・

コムイが言うにはポルトガル語らしい・・・

そんな言葉ソモエが何処で覚えたのかよくしらねえが

勉強したんだろうな・・・

コムイは俺に

「意味は探すんだよ・・・きみが・・・」

つと言った・・・

分かってる・・・ソモエにもそう言われてる

だから俺はポルトガル語を勉強してやっと思味を理解した・・・

「Eu amo novamente a t&a mp; e a cut
e ; me sm o s en hor se re be are d」

（もし生き返つたらまた私は貴方を愛するでしょう・・・）

約束だぞ・・・ソモエ・・・

（後書き）

ふー読んでいただいております^^お疲れ様です^^
次の小説もぜひ期待していただけたらと思います^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7669c/>

もう一つのD灰

2010年10月14日22時12分発行